

言語運用能力を目指す 授業の試み—いかに教 えるかを中心に—

人文学部 高田 晴夫

はじめに

平成4年、日本フランス語・フランス文学会が主催している志賀高原の教員養成の研修に参加し、翌平成5年にもフランスのヴィシー市のキャヴィラム研修所で夏1カ月、研修を受ける機会を持ちました。その時の体験がもとで、フランス語教育法とくに言語運用能力の開発に深い関心を持ち、以来、平成5年に始まった人文学部の集中フランス語、また、全学向けの初級フランス語の授業に、その成果を還元してきました。本報告においては、私のフランス語の授業における言語運用能力の開発の試みについて、いかに教えるかを中心に報告しておくことにしましょう^{註1)}。

1. 言語運用能力を目指す授業とは？

ここで「言語運用能力」とは読む・書く・話す・聞くの4技能にわたるコミュニケーション能力のことを意味します。言語運用能力の開発とは、このような意味におけるコミュニケーション能力の開発ということです。私が現在新潟大学で担当している「初級フランス語」、又とりわけ、人文学部独自で開講している「集中フランス語」の一部は、言語運用能力の開発に

重点を置いた授業であります。学生が教師の指示に従って様々な言語的道具を耳と口から学び、コミュニケーション活動を通して、実践的に外国語に慣れ親しんでいくような授業をイメージしていただきたいと思うのであります。しかもそれほど難しい内容の表現を学ぶのではなく、ごく基本的表現をコミュニケーション活動を通してフランス語を学んでいく授業をイメージしていただきたいと思うのであります。毎回の授業で、たくさんのコミュニケーション活動をクラスの中で行い、実際にフランス語を口に出すという経験を積むのです。

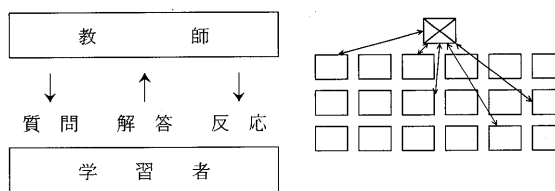
従って、私の授業では、一度もフランス語を喋らずに授業に出席することは出来ないのであります。なぜなら、私の授業は口を開いてフランス語を話してもらうのが目的の授業であるからであります。

2. いかに言語運用能力の開発を目指す授業 を行うのか？

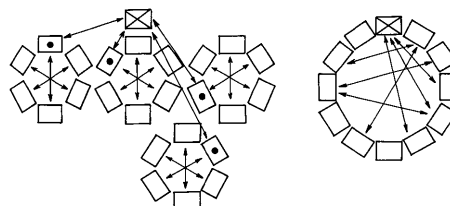
いかに言語運用能力の開発を目指す授業を行ったらよいのでしょうか？言語運用能力の開発を目指す授業を行うためには、まず仕掛けが必要です。それは授業中における教師と学生間の関係とそれぞれの役割を、これまでとは違った形式に、変えるのであります。まず、次の教師と学生間の関係についての図を見て下さい^{註2)}。

2.1. 教師と学生の関係

(A) 教師⇄学生



(B) 学生⇄学生



(A) の関係はこれまでの語学授業では主流であり、(B) のような関係は少なかったと思うのであります。私の「言語運用能力の開発を目指す授業の試み」では、(B) の関係を重視するのであります。(B) の関係が、私の授業においては、重要であります。そこにおいて、学生は主役であり、教師は進行係ないしは脇役でしかありません。そのような関係と役割において学生同士が様々なコミュニケーション活動を行います。私は語学の授業は単に教師が知識を与えるだけでは不十分であると考えます。学生がコミュニケーションの活動や体験を積む必要があります。しかも出来るだけ多くの活動をする必要があります。そのためには、(A) のような関係ではなかなかむずかしいのです。(B) のような関係が是非必要になります。また、(B) は単に、多くのコミュニケーション活動を行うことを可能にしてくれるだけではなく、学生の心理的負担を軽くしてくれるという利点があります。教師が一人一人の学生に質問し、それに対して学生が答えるやり方では、多くの時間がかかるし、リラックスして練習に取り組めないのです。(B) の関係は、学生がリラックスしてコミュニケーション活動に取り組むことを可能にしてくれるのです。また、(B) の様な関係に基づく活動の利点は、授業そのものを活気づけ、学生が主体的に学習できることを可能にしてくれます。一般的に、このような(B) の様な関係に基づくグループ活動の利点をまとめると次のようになるでしょう^(注3)。

(B) の利点

- 1) 一人が指名されて答えるのと違い、心理的負担が少なくリラックスできる。
- 2) 学習者一人一人が多くの学習活動に参加できる。
- 3) グループで、自分の役割、責任を自覚する。
- 4) グループ間に良い意味での競争が生じ、個人にたいしてよりも自由に批判しあえる。
- 5) ある程度の誤用の訂正はグループ内部で互に行える。
- 6) グループ活動中、教師はクラス内を巡回するので学生とのコンタクトが多くなり、問題の発見も容易になる。

2.2. 学生と教師の役割

2.2.1 教師の役割

教師の役割として以下のA)、B)、C) のような点をあげることが出来るでしょう。

A) 学生に指示を与えることであります。指示は手短かに手早く与える必要があります。そのために、教師用マニュアルをあらかじめ作っておいたり、それははじめからある教材を使用するのが望ましいでしょう。今日の学習の目標、個々の練習問題の目的をはっきり述べることにより、学生が何をやればよいか口頭で伝える必要があります。もし、口頭で伝わらなければ、黒板を使ったり、実際に、モデルを示してあげる必要があります。重要なことは、学生が迷わずに、練習できたり、発表できたりするために、的確に指示を与えることです。学生の反応を見ながら、指示を反復して与えたり、具体例をあげたり、モデルを示したりする必要があります。また、必要な知識が欠けているようなら、くどくならないように簡単に補助的知識の説明を与えておく必要があります。

授業中に教師が与える指示の主な例を以下にあげておきます。

- 1) モデルを示しますから、それと同じように皆さんの現実に則して会話しなさい。
- 2) 後について発音して下さい。
- 3) 次のようなことをして下さい。(たとえば：「地図の上であなたはpの地点にいると仮定して、相手に言葉だけで行き先を説明して下さい。そしてもう一人は聞いて行き先を当てて下さい」)
- 4) 絵をみて、絵の人物になって会話してください。
- 5) 今のやりとりについて質問しますので、ouiかnonで結構ですから、答えて下さい。
- 6) 今の発表の会話の内容について、通訳して下さい。
- 7) 5分あげますからペアーで問題を解いてください。
- 8) 何組かに発表してもらいます。何々さんと何々さんといって立たせる。(フィードバック)
- 9) テープを聞いてもらいますから、聞き取れたことを言ってください。

- 10) テープをきいて空白を埋めてください。
- 11) 活用形を書いて下さい。
- 12) テープを聞いて何色が言って下さい。
- 13) テープを聞いて何時か言って下さい。
- 14) もっと大きな声で。
- 15) 教科書は見ないで言って下さい。
- 16) 黒板を見て下さい（フランス語）。

などなど....

B) 学生の質問に答える。

学生が学生同士でコミュニケーション活動に励んでいる間、教室内を巡回し、質問に答えたりします。

C) 気楽な雰囲気。

学生が気楽にコミュニケーション活動が出来る雰囲気を作ってやることです。そのために次の点に気を付けます。

- ・大きな間違い以外は指摘しない。
- ・間違いの指摘は、活動の途中では決してしない。
- ・活動に集中できるように、質問が出ない限りこまかな文法的説明や和訳は行わない。
- ・一緒に活動に参加する。
- ・拍手をしてあげる。(これは中途半端にやると、逆効果であるので要注意。)

2.2.2 学生の役割

すでに述べましたように学生は学生同士で、教師の指示に従ってたくさんコミュニケーション活動を行います。

(大学教育開発研究センターの報告では、授業風景を収録したビデオに基づく学生の役割についての説明が続くが、これは割愛する。)

3. コミュニケーション活動の方法

コミュニケーション能力を身につけさせるための練習には、次の3つの方法があります。授業中にコミュニケーション活動を行わせるための方法として、また、実際に教材を作るための原理として知っておくことは

有益であると考え、また、私の実践している授業を理解していただくために紹介しておきます。

・ ロールプレイによる方法

「ロールプレイ」とは、「学習者が与えられた役割になりきり、その場面に適切な表現を選んで会話を進めていくもので、単なる対話練習とは異なり、自由にシナリオを作り上げて行くところに意外性と面白さがあります。ロールプレイはさまざまな社会的場面や、社会的役割の中で伝達練習をする機会を学習者に与える、非常に有効な手段です。」^{註4)}

eg.

目標 先生にあることを相談するために家を訪れてもよいかたずねる。
学習項目 許可を求める Je voudrais... Puis-je...

A	B
学習者 -許可を求める -日時を言う -違う日時を言う	教師 -日時を聞く -理由を言って 断る -承諾する

eg.

目標 友人を映画に誘う
学習目標 勧誘 Si tu veux... Si on allait...

A	B
映画に誘う	承諾する(断わる)

・ シミュレーションによる方法

「シミュレーション」とは「現実の社会活動をクラスの中で模擬的に行うことを意味します。ロールプレイと同じように、学習者がクラスの外で実際に出会う可能性の高い状況を設定しそこで選択の自由と意外性に富んだ練習をすることで、現実の言語使用場面と類似した経験をすることが出来ます。しかしロールプレイでは、場面や対話は限られ、「話す」「聞く」の技能に限定されますが、シミュレーションでは「話す」「読む」「聞く」「話す」の4技能を使って広範囲の活動を行うことが可能です。たとえば、旅行の責任者となり、皆で旅行案内やホテルのパンフレットを読んで行き先を決める。賛成の理由、反対の理由を言う。決まれば、ホテルに予約の手紙を書く。半ばフィクションでありながら、同様の状況にスムーズに反応できる

よくなるための現実を想定した訓練です。ここでも教師の役割は学習者の自発的な活動を促進することであり、いわゆる教えるという要素はほとんどありません。活動を中断させないよう誤用の訂正や新しい表現の導入はできるだけ避けます。」^{注5)}

私の授業では、これをあまり利用してはいませんが、大変興味深い方法ですので、少し上級の学生用のコミュニケーション活動の方法として取りあげました。フランスには、シミュレーションを全面的に取り入れた教科書として、たとえば「L'immeuble」があります。「L'immeuble」とは建物のことで、この教科書に出てくる建物は、アパートマン、スタジオ、店舗等からなっており、30人（男10人、女11人、子供9人）の住民、犬4匹、猫2匹などあらかじめ条件は設定されています。しかし、住民の国籍、年齢、名前、職業、住民の相互関係などは、学習者が自分たちで決定するようになっていきます。グループを作って皆で決めていく共同作業から授業は始まります。住民の名前を付けるために、電話帳の一部を例示して、フランス人らしい姓の特徴を説明し、暦を示してフランス的な名前を例示するなど、日常生活に見られる資料（documents authentiques）をうまく配してあります。このように、住民がそれぞれの住まいに配分されると、今度は学習者自らが想定した住民となり、生活上必要なコミュニケーションに対応していきます。廊下や階段での住民同士の挨拶、立ち話を作って演じたり、ものを頼んだり、簡単なメッセージを書いたりするなど、様々なコミュニケーションを行うようになっていきます。」^{注6)}

・ インフォメーションギャップによる方法

「インフォメーションギャップ」は、今、私が一番興味をもっている方法です。インフォメーションギャップとは、問題解決作業とも呼ばれ、「状況や役割を設定しなくても、質問し解答を得ることで問題を解決していく学習活動」です。^{注7)}

たとえば、eg.1やeg.2のようなカードを用意し、それぞれのカードをお互いに見せないで、フランス語だけを使って、自分のカードに欠けている情報を相手

に質問して得るのです。カードはかならず、一方に欠けている情報は他方がもっているの、早く情報を完全なものにしたチームが勝ちという風に競わせる事もできて、ゲーム性のある方法です。問題が作りやすく、また、学生にとっても、とっつきやすい初級レベルの方法ですので、取り上げておきました。

*時間的な余裕があれば、インフォメーション・ギャップを取り入れた次のようなゲームをさせる。ペアを組ませ、次のような2枚一組のカードを必要なペア数と同じ組数のカードを用意し配り、お互いに見ないように、又、日本語は使わないように指示を与えて、空白を埋めさせる。時間制限を与えて競わせてもよい。

学生A用のカード		学生B用のカード				
	A	B	C	D	E	
eg.1	1	25		15		5
	2			29		
	3	20	8		19	
	4		11			
	5	3		16		22

自分のカードの空白を、(学生Aなら)「trois C, c'est quel chiffre?」などと言って聞き出したり、相手に(学生Bに向かって)「quatre B, c'est huit」と言って教える。

*第三者についての情報(名前、職業・身分、住んでいる街、働いている街、国籍、年齢)が書いてある次のようなカードをクラスに応じた組数(2枚一組)用意する。

学生A用カード		学生B用カード	
eg.2	名前: Jacques Duval	名前:	
	職業・身分:	職業・身分: journaliste	
	住んでいる街: Paris	住んでいる街:	
	働いている街:	働いている街:	Villetaneuse
	国籍: Belge	国籍:	
	年齢:	年齢: 35ans	

*学生Aは、学生Bに「Qu'est-ce qu'il fait?」のように、学生Bは、学生Aに「Il s'appelle comment?」のようにたずねて情報をうめていく。早く終わった組が勝ち。始める前に、「フランス語以外の言語は使わない、カードを見せたら失格」と言う。カードは学生同士で作らせる。使用するのは作った組の学生とは当然別の学生。

4. まとめ

まとめとして次のような点を指摘しておきたいと思っています。

「言語運用能力の開発をめざす授業」の意義について私自身次のように考えてます。「言語運用能力の開

発をめざす授業」は、本当のことをいえば、何を伝達したいかということが、前提にあってはじめて意味をなす授業となるでしょう。そのような意味で、私の「言語運用能力の開発をめざす授業」で扱うコミュニケーションの対象となる世界は、極めて平易、単純なものであり、あまり意味がない授業であるとお考えの方もいらっしゃるかもしれません。実際学生の中にも、私のような授業に馴染めない学生がいることは確かのようにあります。しかし、文法を一通り終えた後、作品を読む授業の他に、口を開いてフランス語を話してみる授業があってもいいはずであります。なぜなら、そのような授業は、外国語を話せるようになるための第一歩であるからです。また、学生同士が実際に、お互いに意思伝達する行為を行う授業は、「言語の第一次機能はコミュニケーションの機能にあるのだ」という点に、学生に体験的に気づかせるからであります。これは大変重要な点であると思います。学生に多くの表現を口に出す経験を積ませ、フランス語の使い方に慣らすことは、このような意味において、意義があるのであります。

最後に、私の「言語運用能力の開発をめざす授業」と平成5年から始まった集中外国語コースおよび少人数クラスの実現との関連でひとこと言わせていただきます。

私の「言語運用能力の開発をめざす授業」は、コミュニケーション活動による外国語教育であり、学生に学習の主体性をあたえる授業であります。コミュニケーション活動による外国語教育は、言語を学ぶ喜びを与える有効な方法の一つであるといえます。しかしながら、私の授業は、集中フランス語や少人数クラスの実現がなかったなら実現しなかったでしょう。集中フランス語や少人数クラスの実現のお陰で実現できた授業であると申し上げておきたいと思えます。また、この

ような観点から、昨年夏、フランスのボルドーでの語学研修に学生が参加したり、人文学部の日本文化の学生が、フランス語文化の専門Ⅱ種の科目を、2年次にとったりして、全体的にみれば、フランス語の授業を履修する学生の数が増えていることは大変喜ばしいことであり、これも集中フランス語や少人数クラスの実現のお陰であると考えております。個人的には改革がなければ、おそらく、研修をうけることもなく、本日紹介した、外国語教育法。(その是非はともかくとして)に興味を持つこともなかったと言う意味において、これも改革のお陰かなあと感じている次第です。

私の授業は、水泳にたとえれば、水に学生を慣れさせるだけの授業と言えるでしょう。この中から、10メートル、あるいは100メートルを一人で泳ぐことが出来るものもでてくるかもしれません。私は、それを期待しています。私ができることは、道具を与え、その基本的な使い方を教え、学生が心理的負担を感じることなく、クラス内のコミュニケーション活動を通して、実際に使わせることです。出来るだけ多くの活動・経験を通して、学生が意思伝達の喜びを見だし、それを教室の外で使ってみてみたいと思い始めたなら、この私の授業の目的は完全に達せられたといえるでしょう。

私の報告は以上です。ご静聴有難うございました。

注1) 使用テキストは『フランス語21』(白水社、曽我祐典)

注2) 『フランス語をどのように教えるか』(駿河台出版、中村啓佑、長谷川富子) P.232-234参照

注3) 同上P.233参照。

注4) 同上P.225参照。

注5) 同上P.225-227参照。

注6) 同上P.227参照。

注7) 同上P.227-228参照。